



Title	人間のレジリエンスとナラティブ
Author(s)	日高, 直保
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 69-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間のレジリエンスとナラティヴ

日高 直保

要旨

本稿では、人間のレジリエンスとナラティヴの結びつきを明らかにすることで、人間のレジリエンスについて理解を深めることを目指した。人間のレジリエンスにおいては、「意味の行為」という概念により示される、個人が自らの経験を意味づける行為、およびそれにより生み出されるナラティヴが、重要な要因であると考えられた。個人が危機に直面した際、その状況を理解し、適応すべく取られる行為が「意味の行為」であり、人間のレジリエンスと「意味の行為」は深く結びついているのである。また、人間のレジリエンスとナラティヴが結びつく背景として、ナラティヴが生成変化を続けるものであり、経験をネガティヴに意味づけたことによる不適応も、ナラティヴの再構成によってこそ変化する可能性を指摘した。加えて、ナラティヴは個人が望む行為を実行する上で必須であると同時に、個人の世界観や自己観を生み出し、人間がレジリエンスを発揮する基盤を作り上げる存在でもあると考えられた。

目次

1. はじめに
2. レジリエンスについて
3. 問いを考える糸口としてのナラティヴ
4. Bruner の議論からナラティヴとレジリエンスを考える
5. ナラティヴの諸機能について
6. 結論：人間のレジリエンスとナラティヴ

キーワード

レジリエンス
ナラティヴ
意味の行為

1. はじめに

生きる上で、人間は様々な困難に直面する。病への罹患や愛する人との別れといった、生きていく上で避けられない出来事や、テロや天災への予期せぬ遭遇など、私たちの日常を揺さぶる出来事は数多い。

人はそのような出来事に会ったとき、呆然とし、悲しみに暮れる。自らの作り上げた生活が崩れ去り、未来を思い描くことが難しくなる。しかしながら、残酷な現実を前に打ちひしがれたとしても、人はそこから立ち上がることができる。自らの過去と向き合い、その人なりの意味を経験に見出しながら、その先の人生を歩み始めるのである。

そのような人間の力は、レジリエンスと呼ばれている。工学において用いられ始めたレジリエンス概念は、災害（渥美 2021）や医療（小笠原&モハーチ 2021）、そして人類進化（中野 2021）といった、様々なテーマに関する研究に応用されている。心理学においても、1970年代に研究が始まって以来、レジリエンス概念への注目は高く、現在でも盛んな議論が行われている。しかしながら、レジリエンスは新しく誕生した、人間が生きる複雑な過程を指し示す概念であるため、明らかになっていない点も数多い。

では、人は困難に直面したとき、どのように立ち上がり、未来に向けて歩み始めるのだろうか。大きな悲しみや忘れることができぬ痛み、どのような意味を見出しうるのだろうか。コロナ・ウイルスの大流行という未曾有の出来事に直面し、新しい生き方を否応なく求められている今、苦難から人がいかに立ち上がるかを議論することには、大きな意義があると考えられる。

そこで本稿では、レジリエンス概念や経験への意味づけについての議論を紹介し、両者を結びつけながら、人間のレジリエンスについて理解を深めることを目指す。具体的には、レジリエンス概念について概観した後、経験への意味づけ、およびナラティブといったテーマについての文献レビューを行う。先行研究の丁寧なレビューを通じて、経験を意味づける行為が、いかに個人のレジリエンスへと結びつきうるかを示したい。

2. レジリエンスについて

(1) レジリエンスとは何か

レジリエンスとは、大きな脅威や深刻な逆境に晒された際、個人が発揮する力や個人の適応に結びつく要因、良好な適応を達成するプロセスなど、様々なポイントを含んだ概念である。

1970年代に、虐待の経験や貧困といった、発達を阻害するリスクを抱えながらも、健康に育っていく子どもたちの存在に注目することから、レジリエンスの研究は始まった（マステン 訳本2020）。現在では、幼児から大人までの幅広い年齢層を対象に、身体疾患や災害によるPTSD、教育など様々なテーマとレジリエンスを関係づけた研究が行われている（石井 2009）。

レジリエンスはこれまで、保護要因、適応に至る過程、危機に際しての肯定的な結果という三つの側面からとらえられてきた。レジリエンスを困難な出来事に際し発揮される個人要因と考えるか、個人の内外におけるリスク要因と保護要因の相互作用過程、あるいはその結果とみなすかは、現在でも議論が続けられている（村木 2015）。

また、レジリエンスについては多様な議論がなされており、様々な視点から定義づけることが可能である。先行研究では、Masten, Best & Garmezy (1990) による「困難あるいは脅威的な状況にも関わらず、うまく適応する過程、能力、あるいは結果」という定義や、Grotberg (1999)による「逆境に直面し、それを克服し、その経験によって強化される、また変容される普遍的な人の許容力」という定義が代表的なものとされている（齊藤・岡安 2009）。加えて、レジリエンスの構成要因についても、個人要因と環境要因をもとにした「I am」「I have」「I can」の3分類（Grotberg 1999）や、資質的要因と獲得的要因による分類（平野 2010）など、数多くの分類がなされている。

レジリエンスの定義は数多いものの、1) ストレスをもたらす脅威や困難が存在している状況、2) 適応を促進する個人要因および環境要因、3) 良好な適応の3点に着目した概念であることは数々の研究間で一致している（太田・岡本 2017）。しかしながら、その定義や要因の分類、取り扱いについて、見解が統一されているわけではないことが問題視されている（佐藤・金井 2017）。

また、特に本邦においては、レジリエンスの個人要因に注目した数量的研究が多く、環境要因の具体的機能および、危機に直面した個人の複雑な変容プロセスが十分に把握されていないことも問題とされている（太田・岡本 2017）。

（2）問題提起とレジリエンスの定義づけ

太田・岡本（2017）は、レジリエンスについて理解を深める上で、意味づけという視点が重要であると指摘した。危機状況に直面した際、個人が自らの信念とすり合わせながら経験を理解し、得られた理解と信念を統合させる過程を意味づけにとらえ、この視点をふまえることが、個人のレジリエンスを重層的かつ詳細に理解することに結びつくと考えたのである。

数々の先行研究においても、経験への意味づけはレジリエンスの一要因として挙げられている（ボス 訳本2015; サウスウィック&チャーニー 訳本2015）。ボス（訳本2015）は、喪失体験にどのような意味づけをなすかによって、希望が見出されるか絶望的かが変わり、肯定的な意味づけなしには人間のレジリエンスが失われてしまうと指摘した。危機状況をどのように意味づけるかが、個人がレジリエンスを発揮する上での中核的なポイントとされているのである。

それでは、人間がレジリエンスを発揮する上で、なぜ経験への意味づけが重要な役割を果たすのであろうか。太田・岡本（2017）をはじめとする先行研究での指摘を考慮すれば、人間のレジリエンスについて理解を深める上で、この問いについて検討することには意義があると考えられる。

本稿では、人間のレジリエンスにおいて経験への意味づけがなぜ重要であるのか、という問いを考えることを通じて、レジリエンスについての理解を深めたい。また、以上の問題意識に鑑み、本稿ではレジリエンスを「個人が危機状況から立ち上がるに際し、適応的に働く個人の能力および過程」と定義する。個人の能力とその発揮過程という観点から、前述の問いについて検討していく。

3. 問いを考える糸口としてのナラティブ

本稿では、人間のレジリエンスにおいて経験への意味づけがなぜ重要か、という問いについて考える糸口として、ナラティブという概念を取り上げる。ナラティブとレジリエンスという2つの概念を結びつけることで、人間のレジリエンスについて理解を深めることができると考えるためである。

(1) ナラティブとは何か

レジリエンスとナラティブについての議論に入る前に、ナラティブとは何かをあらかじめ定義する。ナラティブとは、翻訳すれば物語と表記される言葉である。物語という言葉が様々な場面で用いられるように、ナラティブという概念も様々な学問分野で用いられるため、その定義も数多い。やまだ(2006)によると、ナラティブの定義は1)時間的秩序を重視する定義、2)始まり・中間・終わりという構造を重視する定義、3) 生成的機能を重視する定義、の3種に大別できる。

1) の定義はナラティブの構造を、いくつかの出来事が時間的に秩序づけられたものとする立場である。次いで2) の定義では、始まり・中間・終わりという構造を有するものとしてナラティブを考える。しかしながら、これらの定義は、クロノロジカルな時間や西欧的な物語の古典的定型を前提にしたものであり、時間的および調和的秩序が物語にとって必須なわけではない、という批判が存在する(やまだ 2000a; 2006)。

上記の批判をもとに生み出されたのが3) の定義である。3) の定義では、「2つ以上の事象をむすびつけて筋立てる行為(やまだ 2000a: 146)」としてナラティブをとらえる。ナラティブを完成されたものとみなすのではなく、構成と再構成が繰り返される中で絶えず変化、生成されていくものとするのである。

さらにやまだ(2007)は、2つ以上の事象が結びつけられることで意味が生み出されると指摘する。そして、事象の結び合わされ方によって意味が変容、あるいは新生することがナラティブにとって本質的に重要と考えた。ナラティブの生成的定義を端的に表現するならば、経験を有機的に組織化し、意味づ

ける「意味の行為(acts of meaning)」となるのである(やまだ 2006)。

(2) 本稿におけるナラティヴの定義

本稿においては、ナラティヴの定義として、3) 生成的機能を重視する定義を採用する。ナラティヴとは、経験を有機的に組織化し、意味づける「意味の行為」であった(やまだ 2006)。言い換えれば、ナラティヴとは、人間が経験を意味づける行為および、その行為により生成されたもの、といえる。

以上の定義をふまえると、経験への意味づけという点において、レジリエンスとナラティヴ、2つの概念が結びつくと考えられる。両者の結びつきについては、章を改めて述べたい。

4. Brunerの議論からナラティヴとレジリエンスを考える

ナラティヴが意味づけという点から定義づけられた(やまだ 2000a; 2006)ことにより、ナラティヴとレジリエンスの結びつきを指摘することが可能となった。そこで本章では、両者の結びつきをより鮮明にすべく議論を続けていく。

やまだ(2000a)が、ナラティヴを定義する際「意味の行為」というBruner(1990)の用語を用いたように、ナラティヴについて考える上で、Brunerの業績は一つの理論的基盤となっている。そこで本稿では、Brunerの議論に立ち返ることでナラティヴおよび「意味の行為」について詳述し、レジリエンスとの結びつきを鮮明化させたい。

(1) 「意味の行為」について

やまだ(2006)は、経験を有機的に組織化し意味づけることを「意味の行為」と呼んだ。Brunerの著書においても、「organization of experience」(Bruner 1990: 55)という表現によって経験を体制化するナラティヴの機能について言及されており、やまだ(2006)の理解はBrunerの主張に反するものではないと考えられる。

しかしながら、やまだ(2006)が行なったように、「意味の行為」を経験の体

制化ととらえることは限定的な理解であり、「意味の行為」はより広い射程を持つとする指摘もある(横山 2018)。

横山(2018)によれば、「意味の行為」とは行為の結果だけでなく、行為の過程についても理解を深めるべく生み出された概念である。このように解すると、やまだ(2006)の理解においては、人はなぜ語るのか、あるいは語ることにによって何をなしえるのかといった問いへの応答が含まれておらず、Bruner(1990)の意図を部分的にしか汲み取っていないと指摘しうるのである。

それでは、「意味の行為」について、やまだ(2006)による理解以上にどのような点を指摘できるだろうか。Bruner(1990)が試みたのは、人間による意味生成の原理と、その機能を明らかにすることであったと横山(2018)は述べる。そこでまず指摘しうるのが、「意味の行為」が発現する原因についてである。

Bruner(1990)によると、物語が紡がれ始めるのは、日常において、個人が当然のこととして他者と共有している信念が脅かされた時である。物事が在るべき形で存在している時、ナラティヴは必要とされない。むしろ、常識から逸脱するような事態に直面した時、ナラティヴが必要となる。言い換えれば私たちは、未知の事態を理解するために、「意味の行為」へと取り掛かる(Bruner 1990; 横山 2018)。

そして、ナラティヴの機能は、直面した事態の逸脱性を緩和し理解可能な状態を作り出すことにある(Bruner 1990)。上記をまとめると、「意味の行為」とは、常識や通例性が破綻する事態に直面し混乱状態に陥った個人が、破綻を乗り越え平静を取り戻すべく、事態を理解可能としうる意味を探索する行為といえよう(Bruner 1990; 横山 2018)。経験を有機的に組織化し意味づける「意味の行為」の背景には、常識の破綻とそれによる混乱、そして混乱状況から適応へと向かおうとする動きが存在しているのである。

(2)「意味の行為」とレジリエンス

前節においては、Brunerが提唱した「意味の行為」について詳述した。続く本節では、「意味の行為」とレジリエンスの結びつきについて述べたい。

先述したように、「意味の行為」が発現し機能する背景には、常識の破綻とそれによる混乱、そして混乱状況から適応へと向かおうとする動きが存在す

と考えられた。そして、このような「意味の行為」の発現条件およびその機能については、第1章において紹介したレジリエンス概念の3要素との共通性が指摘できる。

常識や通例性が破綻する事態に直面する事態は、ストレスをもたらす脅威への直面と換言することが可能であろう。そのような事態において、未知の状況を理解し平静を取り戻すため、換言すればストレスを緩和し状況に適応するため、作動するのが「意味の行為」であると考えられる。つまり、個人が脅威的状況に直面した際、適応に向けてレジリエンスを発揮する上で現れる動きの一つが、「意味の行為」であるといえよう。

Bruner（1990）は、経験を物語の形式で体制化する傾向を、人間が生得的に有していると考えた。人間が生得的に有する傾向性と環境からの刺激が重なり合う中で、経験をナラティブ化する力が育まれるのである。その結果として、不測の事態に直面した際、「意味の行為」という形で危機を乗り越えようとする動きも可能になる。

これまでの考察を総括すれば、「意味の行為」および経験をナラティブ化する力は人間に元来備わったものであり、危機に直面した状況において、適応的に働く個人の能力および行為であるといえよう。言い換えれば、「意味の行為」および経験をナラティブ化する力は、人間におけるレジリエンスの一要因であると考えられる。

本稿の目的は、人間のレジリエンスにおいて経験への意味づけがなぜ重要か、という問いについて検討することであった。これまでの議論をふまえると、本稿の主題となる問いは、人間のレジリエンスにおいて、ナラティブおよび「意味の行為」はなぜ重要であるのか、という問いへと換言できよう。

5. ナラティブの諸機能について

本稿の冒頭で掲げた問いは、人間のレジリエンスにおいて、ナラティブおよび「意味の行為」はなぜ重要であるのか、と換言された。では、この問いにはどのように答えることが可能であろうか。

Brunerの議論をもとに、ナラティブについて論じた森岡（2015）は、物語

の形で出来事を結びつけていく中で経験に意味が見出され、それにより人間は現実を生み出す、と述べる。人間にとって現実とは、事実の総和ではなく、事実に対する意味解釈の結果として生み出されるものなのである(森岡 2015)。

森岡(2015)の議論をふまえれば、ナラティブや「意味の行為」は、経験への意味付与を通じて、人間が生きる現実を作り出す、といえよう。そうであるならば、人間のレジリエンスにおいてナラティブや「意味の行為」が重要である理由は、ナラティブが現実の創出およびその再構を可能にするため、と考えられるのではないか。

以上の推論について議論を進めるべく、本章ではまず、ナラティブの諸機能について詳述していく。

(I) 現実を創出、再構するナラティブの機能

私たちが何らかの出来事を思い出す時、事実を時間的に順序立てる形で過去を振り返るのではなく、いくつかの場面を結びつけ、それらがつながりを持つものとして過去を描き出す(森岡 2015)。そのため、一つの出来事であっても、体験者によって様々な描き方がなされる。そして、自らが編み出してきたナラティブに合う形で、その個人にとっての現実が生み出されていくとされる(Bruner 2002; 森岡 2015)。

「意味の行為」による経験の体制化を通じ、出来事に対する個人的な意味付与が積み重なっていく中で、その個人にとっての現実が創り出されるのである。以上をふまえると、ナラティブおよび「意味の行為」には、個人の現実を創出する機能が備わっていると考えられる。

また、「意味の行為」を通じて、事象の結びつけ方を変化させることにより、個人が経験に見出す意味を変化させることができる(やまだ 2006)点も重要である。やまだ(2006)が述べるように、過去の事実は変えることはできなくとも、ナラティブは変えることができる。それにより、経験に否定的な意味付与がなされ、現実をネガティブなものとなすナラティブが生み出されたとしても、それを変化させることが可能になるのである。

以上の議論から、ナラティブおよび「意味の行為」には、個人の現実を創出するだけでなく、個人の現実を再編していく機能が備わっていると考えられ

る。経験に肯定的な意味づけがなされれば、その個人が生きる現実も肯定的なものとなり、適応がうながされるであろうことは想像に難くない。

また、現実や自己に対しネガティブな認識が生じ、それが苦しみを生じさせている場合であっても、経験への意味づけを変化させることで、肯定的な認識を生み出し直すことも可能といえる。そして、経験を意味づけなおし、苦しみから適応へと向かう流れこそ、人間のレジリエンスと呼ぶべき運動であろう。

(2) ナラティブと自己の関係

前節では、現実を創出、再構するナラティブの機能について言及することを通じ、人間のレジリエンスとナラティブの結びつき方を具体的に示した。

両者の結びつきについて議論を進めるに際し、もう2点、ナラティブが深く関係していると考えられる事象に言及したい。その1つは、「意味の行為」を実行する存在、すなわち、物語る行為の主体となる自己である。

自己とはどのような存在であるか、という問いに対する最も簡潔な説明として、Bruner (1990) は Polkinghorne (1988) による記述を挙げた。Polkinghorne (1988) によると、自己とはナラティブを通じた経験の体制化によって生み出されるものであり、新たな経験をふまえ常に更新され続ける動的存在である。

また、自己としてのまとまりの中には、その人物がどのような存在であったかという過去だけでなく、どのような存在になりうるかという未来も含まれるとされる。さらに、個人のおかれた状況や、社会的規範といった社会的な要因が、自己の生成に大きく関係することも重要なポイントである (Polkinghorne 1988)。

自己はナラティブを通じて創造され続けるのであり、経験をナラティブ化する力がなければ存在しない、と Bruner (2002) は主張した。Polkinghorne (1988) や Bruner (1990; 2002) の議論をふまえれば、自己とは、ナラティブを通じた体制化を通じ、個人の過去や未来、そして個人が置かれた状況など、様々な要因を編み直す中で生み出され、変化していく動的存在といえる。

前節で言及した現実と同じく、自己という存在も、ナラティブを通じ経験

を体制化していく中で、創出、再構されていくのである。つまり、人間にとってナラティブとは、自己という形で自らの連続性を確保するために、欠かせない手段でもあると考えられる。ナラティブは、個人がレジリエンスを発揮する基盤となる自己そのものを作り出すといえよう。

(3) 行為へと結びつくナラティブ

次に、ナラティブが深く関係していると考えられる事象として、個人の行為について述べたい。

Bruner (1990) によれば、何が起きたかについてのナラティブは、だからどうしたいのか、という条件を満たすよう方向づけられるとされる。自らの望む行動をとる際に、常識や通例性とすり合わせる上で、ナラティブは重要な役割を果たすのである (Bruner 1990)。

Bruner (1990) の指摘をふまえれば、不測の事態を理解するためにナラティブを上げることは、その理解をもとに、どのような行動をとるかという選択、および行為の実行に結びつくといえる。言い換えれば、経験をナラティブ化することができなければ、自分の行動や目的を自他に対し正当化することができず、過去の経験と自らの望みをふまえた行動を取りえないのである。

ナラティブは、現実の認識や自己の連続性を生み出すことに加え、常識や通例性をふまえながら、自らの望む行動を実行へと結びつける機能を有するのである。

6. 結論：人間のレジリエンスとナラティブ

前章において、ナラティブと現実、そして自己との関係について論じた。続く本章では、これまでの議論の総括として、人間のレジリエンスにおいて、なぜナラティブや「意味の行為」が重要であるのか、という問いに答えることを目指したい。

(1) ナラティブの諸機能と人間のレジリエンス

ナラティブは、個人が生きる現実や、個人の同一性を保証する自己を創出し、

再構する機能を有する。ナラティヴの再構機能に着目すれば、個人がネガティブな世界観や、自己否定的な考え方を有し、それが不適応に結びついている場合であっても、ナラティヴが生成変化するものであるからこそ、それらの転換が可能になるといえる。

そして、ネガティブな世界観や自己観を再編し、環境に適応していく過程こそ、人間のレジリエンスと呼びうる運動と考えられる。人間のレジリエンスにおいて、ナラティヴや「意味の行為」が重要であるのは、個人の生きる世界がナラティヴによって創り上げられており、ナラティヴを通じてこそ、その再編が可能になるためであるといえよう。

また、自らの望みに合わせた行為を可能にするという点でも、ナラティヴはレジリエンスに結びつくと考えられる。自分の考えに合わせ、目標設定や行動を取れることはレジリエンスの一要素とされる(平野 2010)。平野(2010)が指摘するような、自己理解に合わせた行為の実行を可能にするという点でも、人間のレジリエンスにおいてナラティヴが重要性を有するといえよう。

さらに、ナラティヴは個人の現実や自己を作り出すことで、個人が生きる基盤そのものを創出することも指摘できる。Bruner (2002) が述べるように、ナラティヴがなければ、自己は存在せず、現実を構成する事も難しいと考えられる。そして、現実を構成できなければ、私たちの経験はカオスそのものとなり、種としての生存すら危ぶまれただろう(Bruner 2002)。

同一性を有する自己が存在しなければ、経験の連続性も存在せず、個人がレジリエンスを発揮することは極めて難しいと考えられる。また、現実を構成する能力がなければ、経験を秩序立てて認識する事ができず、レジリエンスを発揮する余地そのものが失われてしまう可能性も指摘できる。

以上の議論をふまれば、個人が世界の中で生き、レジリエンスを発揮する土台そのものを、ナラティヴが生み出しているといえよう。このような理由によっても、人間がレジリエンスを発揮する上で、ナラティヴや「意味の行為」が欠かせない要素となっているのではないだろうか。

(2) さらなるレジリエンス理解のために

本稿では、人間のレジリエンスとナラティヴ、それぞれの概念について説

明し、両者の結びつきについて論じてきた。その結果として、人間のレジリエンスにおいて、なぜナラティブや「意味の行為」が重要であるのかという問いに対し、一つの回答を提示できたと考えられる。

しかしながら、人間のレジリエンスについて理解するためには、さらなる課題も存在している。例えば、ナラティブを通じた現実や自己の創出には、他者との相互作用が強い影響を与えるとされる（やまだ 2000a; Bruner 2002）。そうであれば、人間のレジリエンスとナラティブの結びつきに、他者との対話という要素も絡めた考察が必要になるだろう。

また、やまだ（2000b）が指摘するように、ナラティブは諸刃の剣であり、経験へのネガティブな意味づけにより、個人の適応が難しくなる可能性も指摘できる。経験をナラティブ化すれば、個人が必ずレジリエンスを発揮できるというわけではなく、どのようなナラティブがレジリエンスに結びつくのかという点についても、検討する必要があると考えられる。

個人がレジリエンスを発揮する上で、他者の存在や他者との対話はどのような役割を果たすのか。そして、どのようなナラティブであれば、それがレジリエントなものとなりうるのか。これらのテーマは、それぞれ重要なテーマではあるが、丁寧かつ慎重な検証を必要とする問いでもあるので、今後の研究課題として提示するにとどめたい。

本稿においては、人間のレジリエンスとナラティブの関係性と、人間のレジリエンスにおけるナラティブの重要性が示された。これまでの議論が、両者を結びつける研究の端緒となることを期待し、本稿を閉じたい。

参考文献

渥美公秀

2021 「レジリエンスについて災害研究を通して考える」『未来共創』8: 109-121。

ボス, ポーリン

2015 「あいまいな喪失とトラウマからの回復」中島聡美・石井千賀子監訳、東京：誠心書房。

Bruner, Jerome

1990 *Acts Of Meaning*. Cambridge: Harvard University Press.

Bruner, Jerome

2002 *Making Stories: Law, Literature, Life*. Cambridge: Harvard University Press.

Grotberg, E.H.

1999 *Tapping your inner strength: How to find the resilience to deal with anything*. New Harbinger Pubns Inc.

平野真理

2010 「レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み」『パーソナリティ研究』19: 94-105。

石井京子

2009 「レジリエンスの定義と研究動向」『看護研究』42(1): 3-14。

マステン, アン

2020 『発達とレジリエンス』上山真知子・J.F.モリス訳、東京：明石書店。

Masten A. S., Best K. M.& Garmezy N

1990 Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology* 2, 425-444.

森岡正芳

2015 「ナラティヴとは」森岡正芳編『臨床ナラティヴアプローチ』pp.3-17、京都：ミネルヴァ書房。

村木良孝

2015 「レジリエンスの総合的理解に向けて」『東京大学大学院教育学研究科紀要』55: 281-289。

中野良彦

2021 「人類進化におけるレジリエンス」『未来共創』8: 85-107。

小笠原理恵・モハーチ ゲルゲイ

2021 「医療とレジリエンス——感染症からの試論」『未来共創』8: 123-143。

太田美里・岡本裕子

2017 「レジリエンスに関する研究の動向と展望—環境要因と意味づけへの着目—」『広島大学心理学研究』17: 15-24。

Polkinghorne, Donald

1989 *Narrative Knowing and the Human Sciences*. Albany: State University of New York.

齊藤和貴・岡安孝弘

2009 「最近のレジリエンス研究の動向と課題」『明治大学心理社会学研究』4: 72-84。

佐藤暁子・金井篤子

2017 「レジリエンス研究の動向・課題・展望—変化するレジリエンス概念の活用に向けて—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』64: 111-117。

サウスウィック・M・スティーヴン, チャーニー・S・デニス

- 2015 『レジリエンス：人生の危機を乗り越えるための科学と10の処方箋』森下 愛訳、西大輔・森下博文監訳、東京：岩崎学術出版社。

やまだようこ

- 2000a 「人生を物語ることの意味 ―なぜライフストーリー研究か？―」『教育心理学年報』39：146-161。
- 2000b 「喪失と生成のライフストーリー―F1ヒーローの死とファンの人生」やまだようこ編『人生を物語る：生成のライフストーリー』pp.77-108、京都：ミネルヴァ書房。
- 2006 「喪失といのちのライフストーリー」『日本保健医療行動科学会年報』21：34-48。
- 2007 「ライフストーリー・インタビュー」やまだようこ編『質的心理学の方法―語りをきく』pp.124-143、東京：新曜社。

横山草介

- 2018 「「意味の行為」とは何であったか？―J.S.ブルーナーと精神の混乱と修復のダイナミズム」『質的心理学研究』17：205-225。

Human Resilience and Narratives

Nao HIDAKA

Abstract

This paper is aimed at deepening our understanding of human resilience by clarifying the connection between human resilience and narratives. The act of making sense of one's own experience and the narrative associated with that act both contribute to resilience. When an individual is faced with a crisis, the act of making sense of, and adapting to, the situation is an "act of meaning". Human resilience and "acts of meaning" are deeply connected. Narratives are continuously generated and ever changing. Maladaptation due to negatively perceived experiences can be changed only by reconfiguring narratives. In addition, narratives enable us to carry out our desired actions, help to form our view of the world and ourselves, and create the foundation for human resilience.

Keywords : Resilience, Narratives, Acts of Meaning
